

そよかぜだより

第100号
発行 2010.9.19
毎月1回発行
社会福祉法人
そよかぜ

そよかぜだより100号

ご協力、ありがとうございます

この機会に新しい編集方法を検討します

そよかぜだより1号の発行は平成14年(2002年)6月でした。その前身の「そよかぜ」は191号で終わりましたが、途中で何回か号外の特集号もあったので、通算するとはぼ約300号になります。平成6年に発行した「そよかぜ100号」に次のような記事があります。

「そよかぜは昭和61年に創刊しました。きっかけは私たちが毎月行っている資源回収のさいに、各ご家庭へのお知らせが必要になったためです。回収日に古新聞を玄関先に置いてお留守にされるお宅があります、その方に対して『品物はたしかに私たちがいただきました。来月は何日にきますのでよろしくお願

します』と書いたお知らせが必要でした。そこで、チラシを作るならついでに障害ある人がかかえている問題を紹介して理解を求めていこうというところで、そよかぜを発行することになりました。

あるとき、忙しさを理由に『しばらく休刊します』と書いたところ、思ってもみなかったほど各方面の方から、止めてはだめ、がんばって続けなさいとの励ましや忠告をいただきました。それはほんとうに予想外の反応でしたので、私たちは引くに引けない気持ちになりました。この励ましは、要するに障害をもって生きていく人々への励ましだと思います、気分一新してがんばることにしました」

創刊当初はせいぜい200部程度の発行部数でしたが、現在は2100部です。その間に25年が経過しました。ながいあいだ編集スタイルを変えないできたのは、外見をひとめ見ただけで「ああ、そよかぜだ」と、わかってもらうためでした。

ただ、外見はともかく内容については、あまり長く同じ担当者が続けるのは、マンネリになって新鮮味がなくなりまます。そこで三ヶ月前から各事業所の現況報告の折込を始めました。これをしばらく続けながら、新しい編集方法を内部で検討しようと思っっています。各事業所の担当者が持ちまわりで執筆するか、それとも編集会議を開いて共同で編集するか、やり方はいろいろあると思いますので時間をかけて検討します。

ご協力ありがとうございました。 8月の募金 38,403円
(順不同) 平成22年4月～8月の合計 193,764円

白井 信行	様	藤野 和子	様	北野 浩美	様
帯刀 幸子	様	井上 誠一	様	白井 道代	様
古沢 奈保美	様	大野 元雄	様	田中 明子	様
山下 暉枝	様	森田 勝	様	橋本 亜紀子	様
宇津木 牧夫	様	清水 賢	様	関村 理	様
濱野 岬	様	清水 知子	様	関村 英希	様
袴田 実	様	天満 喜代子	様	平岡 知子	様
山崎 六雄	様	田村 由親子	様	増田 一仁	様
斉藤 忠	様	田村 千佳	様	宇津木 忠雄	様
榎本 正代	様	清水 キヨ子	様	長谷川 キヌ子	様
松岡 竹子	様	尾又 恭子	様	角野 克子	様
角野 満壽子	様	竹内 照夫	様	桜沢 喜作	様
山影 幸子	様	阿部 郁子	様	吉野 満里子	様
小沢 達子	様	平野 喜子	様	関谷 博	様
田中 稔	様	ア-サロンカワノ	様	永岡 智恵子	様
川崎 利男	様	ア-バンデックス	様	榎八洋	様
村野 理子	様	匿名様(2,700円)			

そよかぜだよりが衣替えできると思っています。資源回収への協力と理解を求める姿勢はもちろん変わりませんが、「新しい酒は、新しい革袋に」という先人の教えに従いたいと思います。このことについてみなさまのご指導がいただければ幸いです。

連絡先
ひばり園 578-0855
FAX 578-0466
くれよん 578-2575
つくしの家 578-0855
エール 570-1233
スマイル工房 578-2723
資源回収時のご連絡は「ひばり園」へ

社会福祉法人 そよかぜの

《資源回収》に

ご協力をお願いします
新聞、雑誌、ダンボール
(ボロは扱っていません)

8月は22,220tでした。金額は382,727円となりました。
この収益は、社会福祉法人そよかぜの運営資金になります。
みなさまのご協力ありがとうございました。

10月は第3日曜日17日です。

ご連絡は、ひばり園へ
羽村市栄町3-3-1
042-578-0855

くれよん8月の売上げ
830,050円でした。

羽村市内の小学校と中学校の生徒のみなさんが、各学校単位でプルトップ収集にご協力して下さっています。ありがとうございます。

障害ある人が心の底で求めているものは

人とかかわり、輪に入ること

理想と現実のはざままで職員は悩みます

障害のある人が、自分の欲求や思っていることを人に伝えようとするとき、伝える方法、やり方、表現の仕方などは障害の程度や種類によって実に多種多様です。言葉を使って正しく説明できる人はいないので、できない人はいろんな方法を使って人に伝えようとします。

ある人は、職員の顔をみるとワンパターンな質問を浴びせかけてきます。知的障害のために込み入った会話はできないので、質問は実に単純で子どもっぽい内容です。しかも同じ質問を顔を合わせるたびにくり返します。だからその人は、この質問をすれば相手がどんな返事をするか十分承知していて、その上で質問しているのです。つまり返事が聞きたくて質問しているのではなく、自分と会話をしたいという欲求を満たすために質問をしているのです。

職員同士の会話は内容が理解できないので入っていきませ

ん。そこで自分を相手にしてもらうために一番効果のあるのは質問をすることです。これが能力をフル活動してみつけた最善策でした。

もうひとりの例を紹介しましょう。その人は前に長いあいだ民間の会社で働いていました。ひばり園にきてはじめてのうちは人と交わることが嫌いで、みんなと一緒に食堂で食事をするのも嫌がり「食べたくな

りをする」と職員たちはいつて、そのような性格の人なのだと思っていました。その人も、ひばり園にきて一年ほどすると食堂で食事をするようになりまし

千差万別で、ときには反対にあたかも孤独が好きないように見えることもありますが、よくみていると一人残らず心の底では人とかかわりを必死で求めていることは間違いありません。

の方に話かけてきてよくしゃべります。知的障害のため一般就労のときつらい思いをたくさんしてきたのでしよう。嫌な仕事をやらされ、叱られたり笑われたり、話の中に入れてもらえず、そんな経験が長かったので、人とかかわることを極度に恐れるようになりまし

このような話を紹介したのは、実はこのことに関連して少し気がかりな問題が出てきたからです。つい最近になって一人の職員が軽い心身の不調を訴えました。仕事ができないほど重いものではありませんが、このまま放置しては

て相談にのります。ひばり園が新しく大きな施設になって日々、顔を合わせる利用者は六十人を越えるようになりま

とか「自分がしてほしいことを、人にしてあげなさい」と愛を説くイエス・キリストの教えが念頭にあったのでし

た。その人たちが求めるものがその職員の両方の肩に重くのしかかってきました。限界に近いところでは

この職員は、利用者ひとり一人が求めていることが手に取るように分かり、それに応えようとします。その姿勢は施設職員として真に貴重なものです。「あーもう一杯いっ